

## 座間味港で津波を確認！

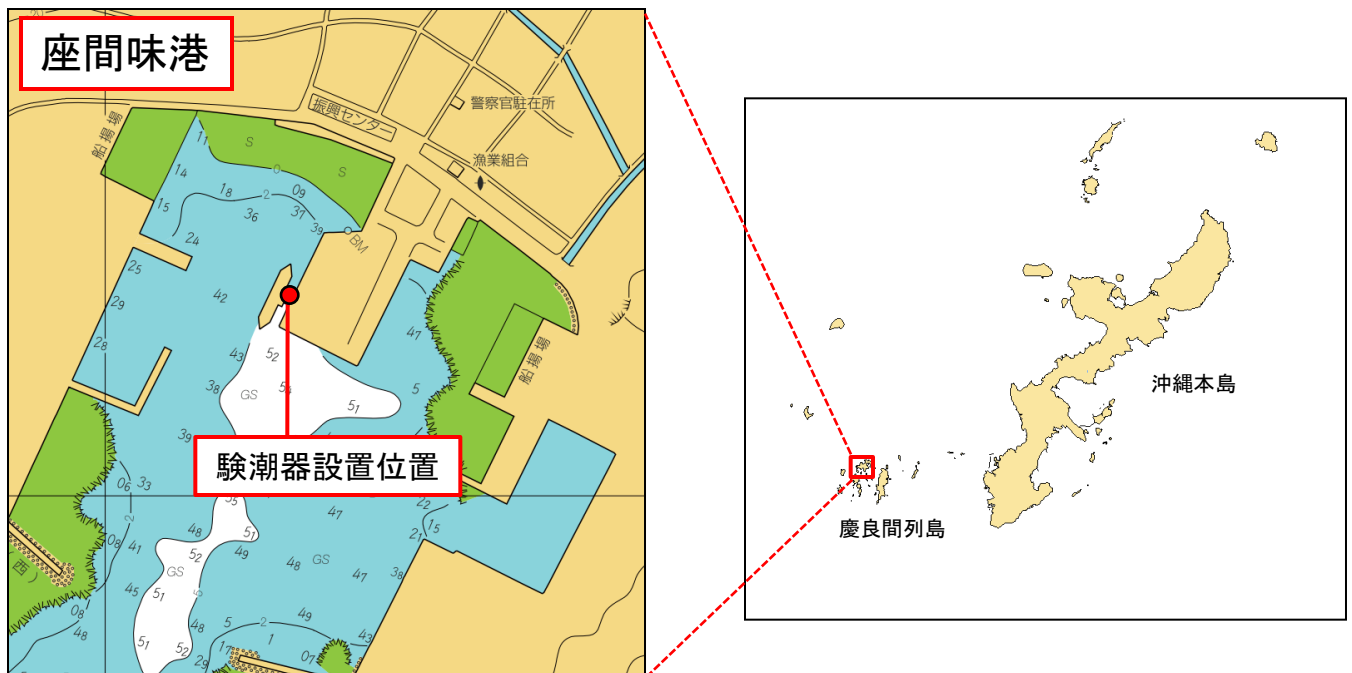
—海図の水深に必要な験潮で津波の貴重な記録を取得—

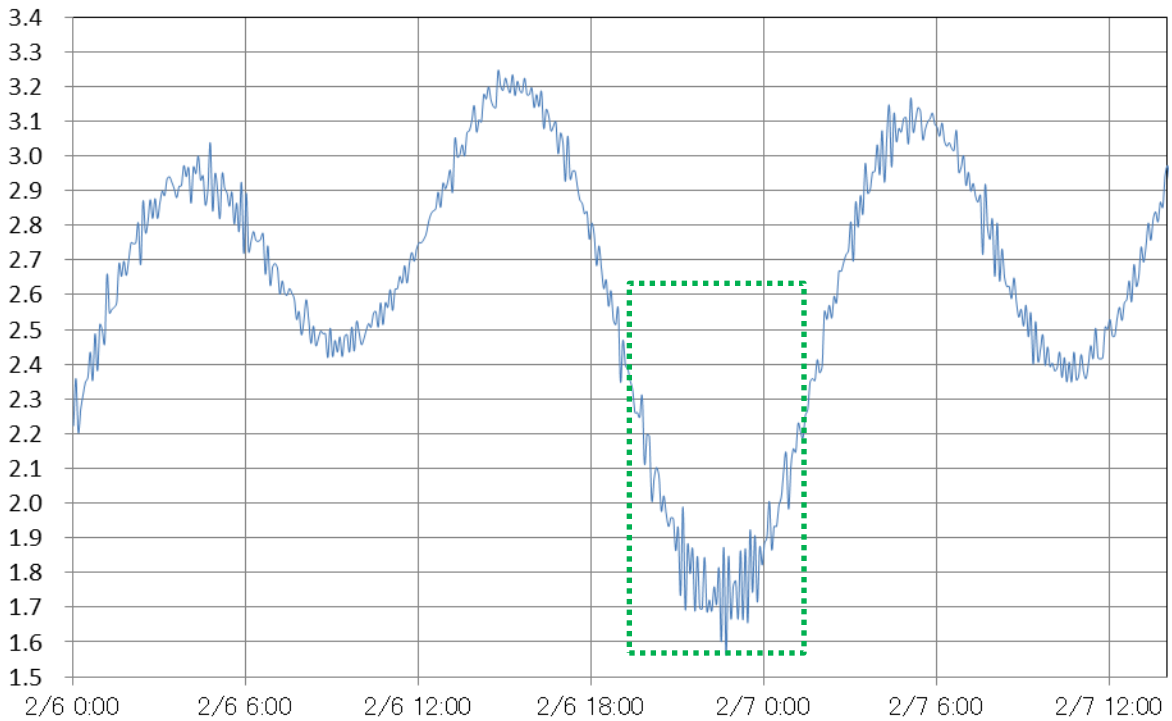
平成25年2月5日から7日まで、沖縄本島の西方にある座間味港の水路測量を行った際に、座間味港に設置していた験潮器で、平成25年2月6日に南太平洋のソロモン諸島沖で発生した地震による津波を確認しました。(資料1参照)

座間味港の水路測量の資料を整理していたところ、2月6日午後10時35分に、高さ約15cmの顕著な津波が記録されていることが分かりました。

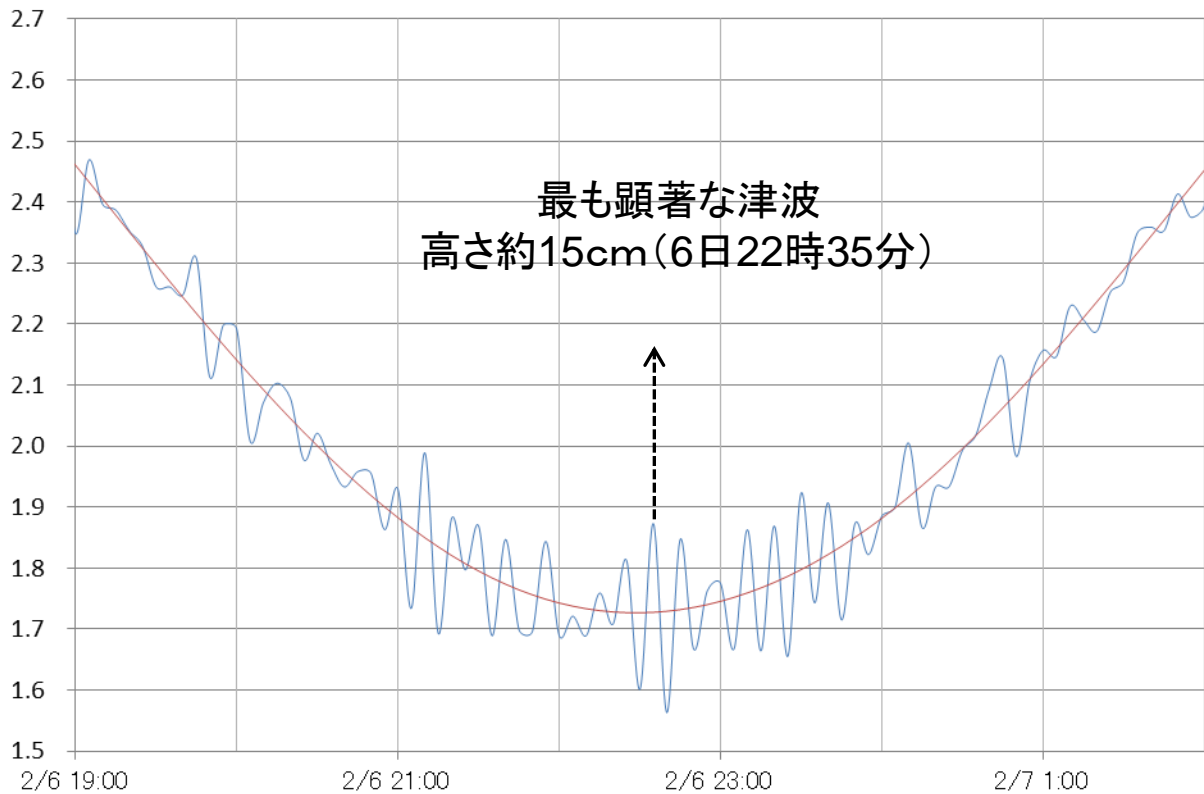
第十一管区海上保安本部では、航海用海図の刊行及び我が国の管轄海域の基盤的な情報を整備することを目的として、水路測量を実施しています。験潮器は潮の干満を測る機械で、水深を測る際に海面がどの高さにあるかを常に把握する必要があることから、調査期間中に座間味港内に設置していたものです。験潮は、調査から得られた水深の値が、海図の水深の基準となる最低水面(最大干潮時)からの値となるよう補正するために実施するものです。(資料2参照)

今回の験潮は、常設された験潮所ではなく臨時に機器を設置したもので、設置期間中に津波の発生がなければ座間味港で津波を記録することはなく、大変、稀であり貴重なものです。今後、この座間味港での津波の記録が防災へ役立つよう期待しています。





平成25年2月6日00時00分～2月7日14時00分の記録



最も顕著な津波  
高さ約15cm(6日22時35分)

 枠時間(平成25年2月6日19時00分～2月7日02時00分)の記録

※ 記録は、5分間隔で計測された値

## 海図の水深と験潮器の関係

海図の水深は、最低水面(最大干潮時)から海底までの深さです。

海図の水深を算出するためには、測量船で測った水深と験潮器の観測データが必要不可欠です。

験潮器は海中に入れた水圧センサーから海面までの水位を測る機器で、潮の満ち引きによる変動を把握することができます。

